

大雪山国立公園におけるジオパーク認定のポテンシャル評価と関係団体の意識に関する研究

北海道大学大学院 環境科学院

環境起学専攻 人間・生態システムコース

張 曉露

大雪山国立公園には関係1市9町（富良野市、美瑛町、上富良野町、南富良野町、新得町、士幌町、鹿追町、上士幌町、上川町、東川町）があり、1市9町の中で鹿追町は2013年12月16日にとがち鹿追ジオパークに認定された。美瑛町と上富良野町は「十勝岳ジオパーク構想」を推進し、石狩川水系1市5町を含んだ東川町と上川町は「カムイの大地ジオパーク構想」に組み込まれている。しかし、ジオパーク化を想定していない市町も存在していることから、本研究では、まず大雪山国立公園におけるジオパークのポテンシャルを評価し、関係団体・組織の意識を明らかにすることを目的として調査を行った。

まず、2209人の公園利用者、すなわち347人の観光客（然別湖、調査日：2016年1月29日；層雲峡、1月30日、3月5～6日）と1862人の登山者（黒岳、7月12～18日、7月22～24日、8月12～14日、9月13～15日；旭岳、8月9～11日、9月16～19日）を対象としてアンケート調査を行った。次に大雪山国立公園管理機関（環境省、2016年3月6日）と関係市町にある団体・組織（あさひかわジオパークの会、1月22日；旭川市環境部環境政策課、5月25日；東川商工観光振興室、1月22日；鹿追町役場ジオパーク推進課、1月30日；十勝岳山麓ジオパーク推進協議会、3月7日；上士幌町商工観光課、3月13日；富良野市経済部商工観光課、5月26日；上富良野町役場総務課ジオパーク推進・地域活性化室、5月27日；上川町役場産業経済課商工観光グループ、5月27日；士幌町役場産業振興課商工観光課、2017年2月10日）にインタビュー調査を行った。また文献調査を行った。

アンケート調査の結果、ジオパークという名前を知っている公園利用者が多い（1451人、65.7%）が、具体的にどのようなものなのかについては理解できていないことがわかった。このことからジオパークが公園利用者十分に浸透しているとは言えない。しかし、大雪山国立公園のジオパーク化への登山者の興味は高い（218人、62.8%）。大雪山国立公園と重複しているとがち鹿追ジオパークの知名度はまだ著しく低い（126人、5.7%）。ジオパークに興味を持っている登山者の比率は高く（900人、71.7%）、もし大雪山国立公園のジオパーク化を推進すれば、地質・地形の保護・保全がジオパークに対して一番役立っていること（929人、73.4%）と考えられる。

次に、大雪山国立公園に関連した団体・組織へのインタビュー調査の結果、関連市町の間でジオパーク認定申請に対する大きな温度差が存在していることがわかった。ジオパーク認定を目指していない市町のいくつかにとっては、経済的効果が期待できるかどうか不透明であることが問題視されている。しかし、全国のジオパークへのインタビュー調査の結果、回答を得た24のジオパークのほとんどでは、設立から5年以上経過してはじめて地元地域で経済的活性化が顕在化したことがわかった。とがち鹿追ジオパークは成立後4年しか経過しておらず、経済効果の評価にはまだ時間がかかると考えられる。したがって、大雪山国立公園でジオパーク化を推進させる際には、長期的な視点と計画が必要であると考えられる。

最後に、文献調査の結果、いくつかの市町では、ジオパークで活用できるジオ資源の活用が十分にできていないことがわかった。

中国の秦嶺終南山グローバルジオパークを参考にすると、そこには5つの「地区」があり、それぞれの「地区」には異なるテーマが設定されている。それぞれの「地区」は大雪山の個々のジオパーク・同構想地域に相当し、広域で一つのグローバルジオパークに認定された。大雪山国立公園には似た状況が認められ、とがち鹿追ジオパークに加えて複数の日本ジオパークが大雪山国立公園で認定されれば、秦嶺終南山グローバルジオパークで見られるように大雪山国立公園の広域でできる複数のジオパークを周遊する観光客を集めることが期待でき、ジオツアーを通して、大雪山国立公園の自然環境の重要性を多くの人に伝えることができるようになることが期待できる。